



大隈講堂に感動

立川稲門会会長 小林和雄

1972(S47)年 理工学部電気工学科

コロナ禍で静かな早稲田の街を、久しぶりに訪れた。テレビ東京「新・美の巨人たち」(早稲田大学大隈講堂×内田有紀)を観て感激し、あらためて大隈記念講堂を眺めてみたいと思ったからだ。

今でこそ一級建築士のはしくれだが、現役時代はコンクリートだらけの殺風景な大久保の理工学部キャンパスで電気を学び、大隈講堂の存在にも建築としての興味もなかった。

ゴシック様式の美しいフォルムに信楽焼タイルの優しい肌触りの外壁に、ウエストミンスターの音を奏でる鐘楼の時計台が高くそびえる外観。ロマネスク様式のアーチ状天井の歩廊に、梅の花をイメージしたやわらかな採光窓が美しくしかもモダンだ。その日は映画開催のため講堂の中には入れなかったが、番組では客席中央の天井にある丸く大きな天窗を紹介していた。太陽を真ん中に月と星のモニュメントは「大学と学問は宇宙を目指す」という建学の精神を表現していると説明されていたが、こんな素敵なものの存在すら知らなかった。坪内逍遙の最終講義ではシェークスピアを肉声で朗読したという、当時日本初で最高の音響空間(今でも通用するらしい)を設計した佐藤教授に敬意を表したい。

「まちに開かれた学び舎」を目指して建てられたという講堂のその配置が私を驚かせた。正門に向

かって斜めに配置された様子を、案内役の内田有紀さんが「正門に対して真直ぐに立ち緊張感のある東大の安田講堂に比べて、柔らかで優しさに包まれますね」と説明。卒業して早50年、なぜ今でも早稲田に魅かれている自分がいるのかようやく理解できた気がした。

近年完成の「早稲田大学歴史館」にも立ち寄り、日本初の私学大学として「民衆のために働く大学を目指す」という大隈侯の精神のもとに学んだ大学草創期の壮士たちの心意気に触れ、あの渋沢栄一が大隈重信と親交あつく大学にも大いに貢献していることも初めて知った。

大隈侯(銅像)がにらんでいるようにも優しく眺めているようにも見える様子を写生しながら、東大でも慶応でもなく早稲田に選んでもらったことに運命を感じ誇らしく思った。



第48回定期総会のご報告

コロナ禍の中、10月16日（土）、たましんR I SURUホール第1会議室にて、コロナ感染防止の対策を取って、「第48回定期総会」を対面とリモートの二元で開催しました。

会員の出席は、対面23名、リモート3名。波多野（副会長）議長の進行で、議題1：20年度活動報告、議題2：20年度会計報告、議題3：20年度監査報告、議題4：21年度役員選任、議題5：21年度事業計画、議題6：21年度予算が、全員賛成で可決されました。



撮影時だけマスクを外しています

東京2020 オリンピック・パラリンピックの思い出



フアール立川のオリンピック・パラリンピック幟



オリンピック・パラリンピック聖火台



有明アリーナ

「大人こそ読みたい絵本の読書会」

志村 順子 1965(S40)年 文
絵本をとりあげるなら、立川市の図書利用カードのイラストがなぜ「100万回生きたねこ」なのかをまず知ってもらいたかった。作者の佐野洋子さんは1992年に幸公民館と若葉図書館共催講演会に「絵本はだれのもの」というテーマで講演をされている。翌年立川市図書館電算化に伴う利用カードに『ねこ』の使用をお願いしたところ快諾され、図書館だよりは「一回きりのいのちを生き抜いたねこ」として大きく発表された。1995年の中央図書館オープンの谷川俊太郎さんの講演会にはご夫婦として出席して下さった。その時すでに初版から18年。そして今40年以上たって220万部以上売れている大人にも心に響く絵本である。誰にも媚びず、最後に好きな相手に巡りあった野良ねこの物語だ。

読書会は10人～15人で、「100万回」の絵本を読みながら私の生き方を考えてみようというアウトプットの会を目指した。特に作者の絵本以外の強烈なエッセイが共感を呼んだり、家族との関係、猫との生活、幸福とは、ジェンダーの視点、また幸公民館で佐野洋子さんの講演を聴いた方もいて、コロナで行き場を失ったおしゃべりをたくさんしていただいた。人の意見を聞くと、改めて自分の考えに出会い、深めることができる。

(この絵本の読書会は、たちかわ市民交流大学の講座として、子ども未来センター、幸学習館、西砂学習館の3会場で開催しました。)

～活躍中の立川稲門会会員の 新刊紹介～

溝口 敦 (島田 敬三 1965 (S40)年 政経)

山口組取材50年

優れたジャーナリストの回顧録



「喰うか喰われるか

私の山口組体験」

(講談社)

『大隈老侯から託されたもの』

後藤勝博 1988(S63)年 教育 早稲田大学職員

広報委員会から、「コロナ禍における早稲田大学の近況と後藤さんの想いを自由に書くように」とのお話をいただき、とても恐縮しています。この会報がみなさまのお手元に届くころには、コロナが収束していることを祈りながら書かせていただきます。

世界中で新型コロナウイルス感染症の感染拡大が始まり約1年半以上が経っても未だ収束の域を脱していません。生命の危機にさらされ緊急事態宣言の発令、教育機関のオンライン授業・企業のテレワーク・医療機関のオンライン診療など…。今までの常識は覆されています。このコロナ禍における本学の感染予防対応は、2020年春からキャンパス立入禁止、授業はオンライン、教職員は在宅研究・在宅勤務、同年秋からは一部の授業で対面を実施しました。2021年春からは、対面授業を推奨していますが、本学が目指した7割対面授業は残念ながら実現していません。特に1年生、2年生に本学キャンパスの魅力を直接伝えることができないのは返す返す残念です。稲門会活動は、昨春から現在まで対面での活動中止や延期等となっています。

このようなコロナ禍、私は本学に勤務する者として医学部と医療機関の必要性をより痛感しています。そこで、大隈老侯の定見をとおして本学と医学の関連の一端を述べたいと思います。なお、歴史的事実の記述は、『早稲田大学小史 第2版』^{注1)}と『久遠の理想（展示目録）—早稲田大学百年史全巻完結記念展—』^{注2)}に依拠し、原文を引用します。

大隈老侯は医学に対しても並々ならぬ関心を抱き、アジア諸国に医学を普及する目的で設立された同仁会の二代目会長に就任し、「同仁会医

院」の設立準備に取り掛かる傍ら、1906年、医師・薬剤師を養成する「東京同仁医薬学校」を早稲田大学敷地内に創設しました。大隈老侯は、早稲田大学が医科を設備するに当たりては、同仁医学校を之れに附属せしめて、清国医学生の需要をも充たす積もりである。^{注3)}と述べています。翌年、牛込に「東京同仁医薬学校」の新築校舎を建て、附属の「早稲田同仁医院」も開設しました。1908年創立25周年記念式典において大隈総長は、理工科と医科の増設を策定した第二期計画を発表し資金募集を始めました。^{注4)}大隈総長と高田学長が資金調達のため奔走した結果、理工科は実現しましたが医科の増設は見送られ、早稲田大学に医科を新設する話は沙汰済みとなりました。^{注5)}

早稲田大学には、大隈老侯の精神が宿っています。私たち早稲田人は、大隈老侯の意志を継ぐ責務があるのではないのでしょうか。約110年前に大隈老侯が計画した早稲田大学医学部設置を具現化させることではないかと考えます。

2021年6月29日 記

注) 参考文献

- 1) 島善高著『早稲田大学小史 第2版』
早稲田大学出版部、2005年
- 2) 早稲田大学大学史編集所編集
『久遠の理想（展示目録）—
早稲田大学百年史全巻完結記念展—』
早稲田大学史編集所、1997年
- 3) 前掲1、75～76頁
- 4) 前掲2、12頁
- 5) 前掲1、76頁

コロナ禍で変化したこと

各界の方々から、寄稿していただきました。



<当たり前>を問い直す

寿台 順誠 1981(S56)年 文 光西寺住職
マスクを着けて生活するのは辛い。特に暑い時期は大変だった。それで昨年(2020)年の7月のある日、道を歩いていて近くに誰もいなかったの、マスクを外してみた。「空気がこんなにおいしかったんだ!」と思った。そんなことを思ったのは、生まれて初めてだったかもしれない。

ここから私は、二つのことを考えさせられた。一つは当たり前にしてきた事が出来なくなると、ごく普通の当たり前の事が、いかに大切で貴重なことだったかがわかるという事である。がその反面もう一つ今迄当たり前にしてきた事は、実は当たり前ではなかったかもしれないとも思わされた。当たり前にしてきた事と言えば、そもそも感染症でこんなに悩む時代がやってくる事など、私たちは全く想定していなかったのではないだろうか。戦後しばらくは、日本人の死因の一位はまだ結核だったがその後、主な病は脳疾患・心臓疾患、そして癌へと移り、「感染症から生活習慣病へ」「急性病から慢性病へ」ということが言われてきた(平成23年度「厚生労働白書」等参照)。それがこの一年でひっくり返ってしまった。どうやら時代は逆流し始めたようである。



山門

光西寺ホームページ
<https://www.kousaiji.tokyo/>



転機

鳥生 尚美 2001(H13)年 法 弁護士
一斉休校、外出自粛、そして緊急事態宣言と、日常生活が強制停止した2020年の春から早一年。働き方、学び方、さらには生き方を否応なく考え直す転機となった。筆者は小さな法律事務所を経営しているが、まずは弁護士・事務職員ともに業務をテレワーク化するための見直しを行った。裁判事務はいまだアナログだし、オンラインでの打ち合わせが難しいケースもあるため、完全なテレワーク化にまでは至っていないが、在宅勤務でかなりの業務に対応できるようになった。

働く場所が制限されなくなると、では「どこでどのような生活をしたいか」と考えた。長女にとって、学校以上に「新たな世界に出会う学びの場」となっていた探求型学習塾もオンライン化した。子供の主体性を第一に尊重され、一年を通して野外で遊び込む「森のようちえん」に通っていた二女の卒園後も考えた時、この価値観と環境の中で子育てが出来る生活がしたい、という気持ちが固まった。そんな流れで、春から軽井沢と立川の二拠点生活を始めている。新幹線で軽井沢から大宮まで乗り、そこから「むさしの号」に乗り続けば、立川まで2時間とかからない。通勤時間中はメールチェックと読書、時に睡眠を補う時間となっている。新しい生活も多少落ち着き、涼しい夏が楽しみな今日この頃である。



軽井沢塩沢湖

次世代への影響

浅谷佳秀 1986(S61)年 法 歯科医
世界をひっくり返したコロナ禍だが、私と妻の変化はさほど大きくはない。二人とも医療従事者だから勤務がオンラインになる事もなく、元々マスクをするのに慣れている。ワクチン接種も終わった。残念だったのは、ジャズピアニストの高瀬アキさんと、一緒にライブを行う予定だったが、延期になった事。(2021年11月19日に渋谷クラシックスでライブを予定していましたが、こちらも延期になりました。詳細は高瀬さんのHPをご覧ください。)

子供たちは、親よりずっと大きな影響を受けている。今年IT関連企業に就職した息子は、受注の仕事が無く、自宅待機。カメラマンの娘は、イベント撮影が激減。劇団役者の娘は公演がなくなり、また大学一年生の娘は、授業もサークル活動も、コンパも制約を受けている。そして小学生の息子は、将棋を覚えて一年でアマ二段になるほど将棋に熱中していたのに、クラスでの対局が無くなって、将棋への興味を急速に失ってしまった。子供たちがコロナ禍に邪魔されたり、壊されたりした物は決して小さくない。

わが身を守る為、世界を望ましからざる方向へ変えないため、子供たちの可能性を狭めないために、今は耐えるしかない。でもいつまでこんな日々が続くのだろう。子供たちの未来はどうなるのだろう。



西砂歯科医院前の筆者

次のステップへの想い

飯名太郎 1999(H11)年 文
フレンチレストランオーナー

このコロナ禍で今までの日常が非日常となり、その非日常ですら、一年半もの大きな災いの中で、今では、日常と化してしまった。行政による規制と人々の行動制限から、以前は当たり前だった事が、前時代的に思えてしまう程だ。

特に人々の距離は、顕著に変わった。以前は、ランチの混雑時に、相席など普通にあったが、今では、とんでもない話。みんな他人との距離を非常に意識している。さらに、この距離感が、このコロナ禍収束後も、簡単に元に戻るとは思えない。人との距離感を含め、この波は、人の意識と社会を想像以上の力で変えてしまった。

そして、その先を見据えてみても、私はまだ霧のかかっている日常しか想像できない。

でも、つまらない日常は、嫌だ。もっと自由を享受したい。そういう思いが湧き出してしまう。そんな中ふと考える。この「自由」という言葉は、霧の中に生きる私たちにとって、当たり前のように寄り添うべきものなのに、あまりに遠くに行ってしまった気がする。

なぜかメディアも政治も、この言葉をあまり発さない。こういう時代だからこそ必要な言葉。それが表に出てこないという事。これが他の細かい事よりコロナ禍で変化した、いや顕著になった事かもしれない。

単純ではあるが、力のある言葉。これが、私たちから遠く離れているのは、あまりにも寂しすぎる。



テイクアウトメニュー

ル・セットシェイナホームページ<https://lesept.jp/>



「古民家園」旧小林住宅

福留 努 2007(H19)年 二文

立川に引越した私が初めて訪れた公園。それが、川越道緑地古民家園です。江戸時代の上層農民の小林家の住居を一般公開しています。近年、須崎家内蔵も移されました。

小林家住宅の完成は1852年。ちなみに同年、土佐では小野梓が生まれています。雑木林と畑。古民家の広くて落ち着いた空間。近隣の中学校から漏れる子供達の笑い声。江戸の農村はこんな雰囲気だったのかもしれませんが。立川に移って良かったと思った瞬間でした。

高松町の給水塔

池浦 慧 2007(H19)年 法

高松駅のすぐ近くに、古い給水塔があります。この給水塔は昭和13年に建設されたもので、戦後は一時米軍に接収された後、平成17年頃まで高松町の南地区に水を供給し続けていました。給水塔は私企業の敷地内にあるため、普段は立ち入ることができません。しかし、イベントなどがあると一般に開放され、その際には米軍兵士が建物内に残した落書きなどを見ることができます。高松町の歴史を感じることができる建築物です。



玉川上水沿いの小径

浅谷 佳秀 1986(S61)年 法

職場まで片道9キロ、お気に入りのルートを毎日自転車通勤している。中でも玉川上水駅から残堀川の上水沿いの、狭い未舗装の小径が最高。車はほとんど通らないし、四季折々の自然の中で色々な珍しい生き物とも出会える。鷺、アサギマダラ、オオミズアオ、玉虫。飛んできたカブト虫がおでこにぶつかったことも。極めつけは猪。帰宅時の夕暮れ時、中型犬サイズの奴がとことこ向こうから歩いてきた。互いに挨拶もせずすれ違った。

同好会だより

散策の会

立川市内の名所、旧跡を訪ねて、のんびりと歩こうと。始まった会。早いもので、20年近くになりました。現在は、市内だけではなく、近郊の里山、公園、名所などを歩いています。当初は、10Kmくらいがめどでしたが、今は、4～6Kmでいどです。毎月（除く7月、8月・・・夏休み）第3水曜日に実施しています。会員にはメールで案内をしていますが、同じ内容を、立川稲門会ホームページにも送信しています。飛び入り参加も歓迎です。入会はもっと歓迎です。

ゴルフ愛好会

ゴルフを通じて老若男女問わず多くの人と交わり親交を深めることができます。ゴルフがうまい人もそうでない人も、日々多忙な人もそうでない人も『新しい感動と出会い』を求めて・・・稲門会ゴルフ愛好会へ。まずはお試し参加でも構いません。一度稲門会ゴルフ愛好会の扉を叩いてみませんか！？

連絡先 山口哲彦 携帯 090-8330-1581
mail : yamaguchi@nagai-komuten.jp

早稲田ラグビーを愛する会

当会は、毎年2回、11月23日（祝）の早慶戦、12月第一日曜日の早明戦観戦応援を行っていますが、コロナ禍以降、活動を断念、全面中止となりました。一日もはやく、コロナの終息により、仲間の皆さんと共に、観戦応援できる日を待ち望んでいます。

連絡先が明記されていない同好会に関する問い合わせは、立川稲門会代表メールへ。

tachikawatomon@gmail.com

談話サロン

この会は2012年7月に発足し（立川市社会教育団体に登録）、会員の皆様の貴重な体験談、趣味、研究テーマなどについてのお話を頂き、寛いだ雰囲気の中で語り合う場です。講師は主に当会員ですが、近隣の稲門会の方々・校友の時もあり交流の輪を広げています。終了後、講師を交えての語らい又懇親会も好評です。人との出会いを大切に感性を磨き、視野を広め充実した日々を過ごすことをモットーに活動をしています。

◆開催日：毎月第2火曜日2:00～4:00（除く8月）

◆場 所：立川市こども未来センター会議室

◆参加費：500円

◆幹 事：小宮山 正 明（S43年理工）

稲酔会

稲酔会とは、読んで字の如く、楽しくお酒を飲みながら地域の垣根を越えて、稲門同士で交流を深めることをモットーとしています。稲酔会は年3回の例会を中心に活動をして参りました。春の早慶レガッタは、アサヒビールのゲストルームをお借りして、武蔵野稲門会をはじめとする近隣稲門会と合同で応援を行います。夏は、立川近辺で暑気払いを行います。秋は、青梅線沿線の稲門会と合同稲酔会を開催しています。一日も早く、皆様とまた一杯飲める日を心待ちにしております。

（代表／長野長正 事務局／上野竜造）

訃報 野宮 彬さん

1946(S21)年 理工

野宮彬さんは立川稲門会創立時のメンバーでした。初代会長が猿渡栄一さん、副会長が砂川昌平さんと野宮彬さんです。野宮さんは学徒出陣で雨の神宮球場を行進した方です。2008年の稲門祭の時も三多摩テントで一緒しました。その時も大隈庭園にある慰霊碑にお参りにいらしていました。私は理工科で後ろの方を行進したけど前を行進した文科系の学生さんは犠牲になってしまったとよく話されていました。80歳過ぎまで立川稲門会の役員として会議に、そして90歳過ぎても総会や納涼会に参加してくださいました。今年5月で99歳のお誕生日。若々しいお声で恵比須様のような笑顔の大先輩でした。（享年98歳）

編 集
後 記

コロナ禍の中、7人の編集委員で、2月から10月まで8回にわたるZoomでのリモート編集委員会のほか、メールでのやり取りを経て、完成したものです。横書きにし、読みやすく、楽しんでいただける会報をめざしました。読んで、少しでも明るい気持ちになっていただけると幸いです。（伊藤裕康）

